# おくのほそ道

## 松尾芭蕉

作者

**松尾芭蕉**

正保元（一六四四）年～元禄七（一六九四）年。名は宗房。俳号は芭蕉、別号は桃青・釣月軒・泊船堂・風羅坊など。祖父の代まで伊賀の国柘植の郷士で、父与左衛門の時代に上野に移り住んだ。二男四女の次男。

**▼略歴・業績**

若くして藤堂藩伊賀上野付きの侍大将藤堂良精の嫡子良忠に仕えたが寛文六（一六六六）年、良忠が病没したため退身した。良忠は蟬吟と号し北村季吟に従って俳諧を愛好していたので、芭蕉も俳諧に親しんできたが、退身後に諸学を修めるうちに俳諧で身を立てることを志すに至ったようである。寛文十二（一六七三）年、上野の天満宮に最初の撰集「貝おほひ」を奉納し、それを携えて江戸に下り出版した。江戸では小沢卜尺・杉山杉風らの援助で宗匠としての地歩を固めたが、延宝八（一六八〇）年冬に俗を避けて深川六間堀の芭蕉庵に移った。この頃、深川の臨川庵に参禅している。

天和二（一六八二）年の歳末、江戸の大火で芭蕉庵が焼失し、甲州谷村の高山麋時宅に身を寄せ、翌年冬には再建された第二次芭蕉庵に入った。この年に蕉風の発足を示す、宝井其角撰「虚栗」が刊行されている。貞享元（一六八四）年、帰省のための「野ざらし紀行」の旅をしたが、その間、名古屋の連衆と詠んだ「冬の日」五歌仙は、蕉風開眼の記念碑的撰集となった。これ以後、他界するまでの約十年間、一所不住の念をもって旅に生き、そして充実した俳諧活動に明け暮れた。貞享四（一六八七）年八月の常陸鹿島への「鹿島紀行」の旅、十月から貞享五〔一六八八〕＝元禄元）年四月にかけて郷里から吉野、須磨・明石などを訪れた「笈の小文」の旅、貞享五年八月名古屋より木曽路を経て江戸に帰着する「更科紀行」の旅、元禄二（一六八九）年の「おくのほそ道」の旅と、立て続けに旅行をした。引き続いて、伊勢・近江・伊賀・京などに滞在して、「幻住庵記」「嵯峨日記」などを草した。芭蕉の指導のもとに成立した去来・凡兆撰「猿蓑」は元禄四（一六九一）年七月に出版されたが、重厚閑雅な「さび・しをり」の句境を示している。同年冬に江戸に帰り、翌年第三次芭蕉庵に入ったが、元禄七（一六九四）年には西国への旅に出発し、その途中の大坂で病となり、十月十二日に没した。生前の六月に最晩年に追い求めた、枯淡軽快の趣の「軽み」の俳風を見せる野坡ら撰「炭俵」が出版された。こうして芭蕉一門の達成した蕉風俳諧は、「芭蕉七部集」（冬の日・春の日・曠野・ひさご・猿蓑・炭俵・続猿蓑）と総称される代表的撰集七つに集約されている。

## 出典

**▼底本**

日本古典文学大系「芭蕉文集」杉浦正一郎・宮本三郎・萩野清校注、昭和三十四（一九五九）年、岩波書店刊）による。特に原文と変えたところはないが、漢字・送り仮名・句読点・読み方などについては、教科書としての統一した体裁に改めた。

**▼成立**

俳諧紀行。一冊。成立過程は明らかではないが、主に元禄五（一六九二）年から翌六年秋頃までに執筆し、その後も推敲を重ね、元禄七（一六九四）年春までには定稿を得たと推測されている。同年夏には、門人の書家柏木素龍に清書させており、その素龍筆写本は現在まで伝えられている。「おくのほそ道」は元禄十五（一七〇二）年に京都の書肆井筒屋庄兵衛より出版されたが、その底本は素龍筆写本である。現在では、素龍筆写本系統の本文が定稿として、信頼されるに足りるテキストになっている。

**▼書名**

壺の碑の条に「かの画図にまかせてたどり行けば、おくの細道の山際に十符の菅あり」とある、仙台の東北の道の名を取ったもので、芭蕉はそれを広く奥州路の意に用い、また、たどり行く風雅の細き一筋をも象徴させたのである。

**▼内容**

芭蕉四十六歳の元禄二（一六八九）年三月に門人河合曽良を伴って千住の宿に第一歩を踏み出し、室の八島・日光・那須・白河の関・須賀川・仙台・塩釜・松島・石巻・平泉・尿前の関・尾花沢・立石寺・最上川・出羽三山・酒田・象潟・鼠の関・市振・金沢・山中・全昌寺・永平寺・福井等を経て、八月下旬美濃大垣に着くまでの足かけ六か月、二四〇〇キロの大旅行の紀行である。

旅の動機についてはいろいろなことが考えられる。例えば、和歌の世界で定着していた歌枕の探訪や、元禄二年が崇拝する西行の五百回忌に当たり、それを記念してというのも動機の一つであろう。さらには古人の心に接しつつ、不易・流行の意味を実感として体得し、悠久な自然とはかない人間の変化の相に思いをいたそうとすることもあったろう。さらにまた作者の人生観・自然観より発する漂泊の思いへの憧れ、新風への意欲、紀行文への意欲などの内面的動機もあったろう。「おくのほそ道」は旅の忠実な記録ではない。昭和十八（一九四三）年に刊行されて話題となった「曽良旅日記」（「奥の細道随行日記」）によって、事実との違いがかなり明らかになり、単なる記憶違いのほかに意識的な省略や事実を前後させるなど潤色の跡が指摘されている。芭蕉は、東北・北陸地方を旅した経験に基づいて、文芸作品としての紀行文を創作したのであって、全体の構想と俳諧紀行であるところの発句との調和とを十分に計算した叙述となっている。特に、構想に関して連句形式の進行の仕方との連関が指摘されており、市振の宿で遊女の一行と同宿した記事などにその最も顕著な例が見られる。なお、紀行に関する芭蕉の見解が「笈の小文」に見えており参考になる。「野ざらし紀行」「笈の小文」などの先行の紀行文に比べて、旅の規模が大きいだけでなく、最も完成された紀行文学として評価が高い。旅を愛するゆえに辺地をさすらうという旅のイメージ、自然への観入と歴史への帰一とが一体化した詩心の在り方など、

旅の文芸を代表する作品であり、後世に多大の影響を与えた。俳人、またはもっと広く、文人の旅の記の範となったばかりでなく、日本人にとっての旅の一つの典型を示すものとなっている。

## 参考

「笈の小文」の一節に次のように記されている。

抑、道の日記といふものは、紀氏・長明・阿仏の尼の、文をふるひ情を尽してより、余は皆俤似よひて、其糟粕を改る事あたはず。まして浅智短才の筆に及べくもあらず。其日は雨降、昼より晴て、そこに松有、かしこに何と云川流れたりなどいふ事、たれたれもいふべく覚侍れども、黄奇蘇新のたぐひにあらずば云事なかれ。されども其所々の風景心に残り、山館野亭のくるしき愁も且ははなしの種となり、風雲の便りともおもひなして、わすれぬ所々、跡や先やと書集め侍るぞ、猶酔る者の妄語にひとしく、いねる人の譫言するたぐひに見なして、人又妄聴せよ。

## 参考文献

❖ 教師用

▽注釈書

**新編日本古典文学全集「松尾芭蕉集」**井本農一他　小学館　平九
**新潮日本古典集成「芭蕉文集」**富山奏　新潮社　昭五十三
**日本古典文学大系「芭蕉文集」**杉浦正一郎他　岩波書店　昭三十四
**「おくのほそ道大全」**楠元六男他　笠間書院　平二十一
**「おくのほそ道評釈」**尾形仂　角川書店　平十三
**「自筆本奥の細道」**上野洋三他　岩波書店　平八
**「おくのほそ道」**久富哲雄　講談社　昭五十五
**「詳考奥の細道増訂版」**阿部喜三男他　日栄社　昭五十四
**「芭蕉おくのほそ道」**萩原恭男　岩波書店　昭五十四
**古典俳文学大系「芭蕉集」**井本農一他　集英社　昭四十五
**「校本芭蕉全集」**阿部喜三男他　角川書店　昭三十七～四十四

▽入門書・研究案内・辞典

**鑑賞日本古典文学「芭蕉」**井本農一他　角川書店　昭五十
**鑑賞日本の古典「芭蕉集」**井本農一　尚学図書　昭五十七
**研究資料日本古典文学「連歌・俳諧・狂歌」**大曾根章介他編　明治書院　昭五十九
**「総合芭蕉事典」**栗山理一他　雄山閣出版　昭五十七
**「芭蕉はいつから芭蕉になったか」**佐藤勝明　NHK出版　平二十四

▽研究書

**俳句シリーズ・人と作品「松尾芭蕉」**宮本三郎他　桜楓社　昭四十二
**別冊国文学「芭蕉必携」**尾形仂　学燈社　昭五十五
**日本の作家「永遠の旅人松尾芭蕉」**白石悌三他　新典社　平三
**「芭蕉の本」**中村幸彦他　角川書店　昭四十五
**「芭蕉物語」**白石悌三他　有斐閣　昭五十二
**「芭蕉講座」**芭蕉講座編集部　有精堂　昭五十七～六十

**「芭蕉論」**上野洋三　筑摩書房　昭六十一

**❀ 生徒用**

**新潮古典文学アルバム「松尾芭蕉」**雲英末雄　新潮社　平二
**「新版　おくのほそ道　現代語訳／曽良随行日記付き」**（角川ソフィア文庫）頴原退蔵他　KADOKAWA　平十五
**「すらすら読める奥の細道」**立松和平　講談社　平十六
**「芭蕉の表現」**上野洋三　岩波書店　平十七
**「おくのほそ道」**ドナルド・キーン訳　講談社　平十九
**「芭蕉」**田中善信　中央公論新社　平二十二

**図版解説**

**〈芭蕉行脚図〉**

天理大学附属天理図書館蔵。元禄六年（一六九三）作。一幅。紙本淡彩・掛幅装。森川許六筆（一六五六―一七三五）。許六は芭蕉に師事し、画事にも通じた。芭蕉と曽良の旅姿を描く本作は、芭蕉生前の作で、最も信頼のおける画像。⇩ P 99

**〈中尾本『おくのほそ道』〉**

中尾松泉堂蔵。江戸時代中期より所在不明だった芭蕉自筆『おくのほそ道』草稿本の存在が平成八（一九九六）年に公表され、筆跡から芭蕉の真蹟であることが明らかにされた。⇩ P 105

**〈曽良本『おくのほそ道』〉**

天理大学附属天理図書館蔵。芭蕉の自筆と考えられている中尾本を、弟子の曽良が移した本である。本書には朱点や訂正が施され、その書き入れを芭蕉自筆とする説もある。⇩ P 105